

# 外国語学習者の「逆向転移」に対する評価と認識 ——インタビュー調査の結果を踏まえて

## Foreigner language learners' evaluation and perception on "backward transfer" —— Based on the outcome of an interview survey

羅 沢宇

英語・中国語教育センター

LUO Zeyu

The English and Chinese Language Education Center

本稿は羅 (2015) と羅 (2016) の続編として、筆者が行ったインタビュー調査の結果を中心に展開している。特に「逆向転移」に対する客観的な評価や「逆向転移」の問題が意識にのぼるか否かという「気づき」の問題などに注目し、分析を行った。その結果を書物などに見られる魯迅や江崎玲於奈の言語観とも突き合わせて、その背後にある共通性について言及する。

Ra (2015) and Ra (2016) discussed some aspects of the "backward transfer" phenomenon. This paper did a further discussion on this topic by surveying the outcome of an interview, which surveys foreigner language learners' evaluation and perception on "backward transfer". The analysis part focuses on language attitude and awareness. In addition, Xun Lu and Leo Esaki's views of language are also surveyed in order to find the features in common.

キーワード：

逆向転移 言語意識 干渉 マルチコンピテンス

### 1. はじめに

本稿は羅 (2015) と羅 (2016) の続編として、引き続き外国語学習者に見られる学習する外国語(目標言語)が母語に与える影響、いわゆる「逆向転移/backward transfer」について議論する。

羅 (2015) では、中国語を母語とする日本語学習者に見られる中国語の不自然さに焦点を当て、そのうち「逆向転移」の影響によるものと思われる用例を挙げながら、具体的にどこが不自然なのか、なぜ日本語の影響と考えるのかを記述し、書記法、語彙、文法、文章構成という4つのカテゴリーにおいて、それぞれが占める割合も合わせて示した。

羅 (2016) では、羅 (2015) で触れなかった「逆向転移」の度合いと個々人の社会的属性(性別、年齢、日本語レベルなど)との関係を、中国人の日本語習得者を対象に行った非文判断のアンケート調査(本稿では「調査A」と呼ぶ)の結果に基づいて考察した。主な結論として、1) 女性は男性より「逆向転移」を受けやすい、2) 日本語レベルが初級～中級の学習者が最も「逆向転移」を受けやすいといったことが判明した。

本稿は、調査Aの直後に行われた言語意識に関するインタビュー調査(本稿では「調査B」と呼ぶ)の結果を中心に展開する。社会的属性が異なる13名の被調査者がそれぞれ「逆向転移」現象に対するどう思っているのかを調査し、特に「逆向転移」に対する客観的な評価や「逆向転移」の問題が意識にのぼるか否かという「気づき」の問題などに注目し、分析を行う。その結果をさらに書物などに見られる魯迅や江崎玲於奈の言語観と突き合わせて、その背後にある共通性についても言及する。

### 2. 先行研究

まず、本稿が論じる「逆向転移」という用語の定義、概念、理論的背景などに関しては、すでに羅 (2015、2016) などで論じたことがあり、本稿では紙幅の関係で、繰り返さないことにする。詳しくは、羅 (2015、2016)、それから、本格的な研究の嚆矢とされるCook (2003) と最新の研究展望である村端・村端 (2016) を参照していただきたい。簡単にこの用語について説明すると、外国語の学習者に見られる「学習する外国語(目標言語)が母語に与える影響」、「学習する外国語から母語への転移」というようなものと考えて差し支えない。

「逆向転移」(あるいはCook (1991) の提唱する「マルチコンピテンス/Multi-competence<sup>1</sup>」) に関する研究はここ十数年間、少しずつ増えてきたとはいえ、まだまだ十分に検討されていない部分も多く、村端・村端 (2016: ix) では「質・量、両面からみれば、その研究はまだ萌芽期にあるといってもよい」と評した。

特に本稿の扱う言語に対する評価と言語意識の面に関しては、まだまだ少ないと言わざるを得ない。ここでは、本稿と関連のある2本を中心に紹介したいと思う。

#### 2.1. Jarvis (2003)

Jarvis (2003) は、フィンランド語の母語を持つ、英語上級学習者Ainoさん(女性)を対象に行ったケーススタディーである。

第二言語が第一言語に与える影響(Jarvis 2003では「L2 effects」と呼んでいる)を調べるため、まずAinoの日常生活から「自然会話資料<sup>2</sup>(natural-use data)」を収集し、収集したデータから母語話者の協力を得て「L2 effects」と思われる誤用例15例を抽出した。

次に、抽出した15例の誤用をもう一度引き出すた

め、映画の内容を母語で説明してもらおうタスクを行い、そこからいわゆる「臨床誘発データ (clinical elicitation data)」を収集しようとしたが、1例も出現しなかったという。

それから、最初に抽出した15例をもう一度「文法性調査 (metalingual judgements)」でAino自身に判断してもらい、その後「自己レポート (self-report data)」もしてもらった。

本稿の調査を実施する際、特にこの「自己レポート」の部分がヒントになったため、ここでその実施方法について、もう少し詳しく紹介する。

「自己レポート」は文法性調査の後に行われ、各用例に対し、下記の3点を問うた。(Jarvis 2003: 98)

- (a) whether she thought it was acceptable to Finns living in Finland  
(フィンランドに住む母語話者にも通用すると彼女は思うか)
- (b) whether it sounded okay to her despite what Finns in Finland might think  
(フィンランドに住む母語話者に通用するかどうかは別として、彼女自身は問題ないと思うか)
- (c) whether she would ever use that structure herself  
(彼女自身はこういう言語表現を使うのか)

結果として、Ainoは15例のうち、12例は母語話者に通用しないと判断しつつ、7例は彼女自身は文法性に問題がないと判断した。このことから、Jarvisは、つまり、Ainoのフィンランド語に対する明示的知識 (explicit knowledge) と暗黙的知識 (implicit knowledge) は時々矛盾する (often at odds) と指摘する。(Jarvis 2003: 99)

また、全体の結論部分では、タスクの違いによって結果が変わるという事実も指摘している。(Jarvis 2003: 99-101)

羅 (2016) や本稿の調査をデザインする際、筆者は調査の進め方に関してJarvis (2003) から多くのヒントを得た。

ただし、Jarvis (2003: 82) の関心事 (L2 effects の現れる場所など) は本稿の趣旨とかなり異なっている。「自己レポート」こそ行ったものの、結局文法性とそれに関する内省の問題しか取り上げておらず、本稿が関心を持つ使用している言語に対する評価と認識の面に関してはほとんど言及していない。

## 2.2. 尹 (2016)

### 2.2.1. 概要

韓国語には、日本語の授受動詞「もらう」に対応する動詞「batda」があるが、日本語の「～てもらう」のような補助動詞としての使い方は韓国語にはない。そのため形態上対応する「a/eo batda」という表現は一般的に誤用とされているが、日本に滞在する韓国語学習者は「a/eo batda」を使用することがあるという。(尹2014: 49-50、尹2016: 1-2, 6-26)

尹 (2016) は、この「～てもらう (a/eo batda)」表現を取り上げ、5つの調査を通して第二言語から第一言語への言語転移現象<sup>3</sup>の実態を解明しようとしたものであ

る。

時系列上、本稿の調査を実施する際、尹 (2016) を参考できなかったが、数少ない韓国語—日本語の報告であり、調査方法や考察も示唆に富むものが多かったため、本稿を執筆する際、大変参考になった。特に、この分野の研究は方法論自体定まっていないという不足を補うために、複数の調査を行い、様々な側面からのアプローチすることによって、説得力が増している。全編計5つの調査が行われたが、本稿では、本稿と関係のある言語意識を調べる最初の調査を紹介する。

この意識調査において尹氏は、韓国人日本語学習者88名を対象に、アンケートによる意識調査を行い、①逆転移 (原文どおり) について学習者自身がどのように認識しているのか、②逆転移に対する認識の度合いは日本語の学習環境によって異なるのか、③韓国人日本語学習者が認識している逆転移の例はどのようなものなのか、という3つのクエスチョンに対し、それぞれ仮説を立て、調査した。

調査用アンケートは二者択一式27問と自由記述式1問によって構成され、「日本語を学習し、韓国語の発音が良くなった」、「日本語を学習し、韓国語の単語が思い浮かばなくなった」といった指示文を提示し、被調査者に該当するかどうかを判断してもらった形をとっている。(尹2016: 41-43)

結論として、「韓国人日本語学習者は、逆転移に対して、全体的には肯定的な影響、個々のレベルに関しては、否定的な影響として捉えていることが分かった。また、学習環境により影響の度合いが異なることが分かり、比較的日本語への接触頻度が高いと思われるJSL環境の韓国人日本語学習者は、逆転移に対しより敏感であるということが明らかになった。さらに、自由記述式調査を通して、様々なレベルにおける逆転移の実例も確認できた」と述べた。(尹2016: 53)

### 2.2.2. 検討と批判

この意識調査の目的に関して、尹 (2016: 37) では「多重言語能力が肯定的か否定的かに対する判断は、多重言語能力を持っていると考えられる第二言語学習者自身が認識するものであり、実際に第二言語学習者が逆転移についてどのように思っているのかについて調べる必要があると思われる。管見の限り、逆転移についての認識に関する調査を行った研究は見当たらない」と述べている。

意識調査は、「逆向転移」の仕組みを解明する上で無論必要であるが、尹 (2016) のいう「認識に関する調査」は少し違うものであった。アンケートの調査項目から見れば、尹 (2016) はどうも学習者が「逆向転移」を肯定的に捉えているのか、それとも否定的に捉えているのかにかん関心がないようである。

その一端として、先行研究について、尹氏は「多重言語能力を理論的基盤として行ったPavlenko (2000) 研究で、逆転移から見られた5つの特徴の中に、第一言語の喪失が含まれているということである。喪失という概念は否定的に捉えるべきであり、逆転移を肯定的に捉えている多重言語能力の概念とは矛盾しているのではないと思われる。さらに、借用転移、融合、転換、再構造化転移という他の特徴においても、本来の言語体系や文法、意味などから逸脱している場合は、否定的に捉えるべきであると思わ

れる」(尹2016:37)と述べているが、それはあくまで先行研究の視点の違いによるものではないだろうか。

また、考察のところでは、「全体的には学習環境に関わらず、悪い影響よりは良い影響として逆転移を捉えており、逆転移に関する総体的な認識に関しては、Cook (2003) やPavlenko (2000, 2004) などの主張を支持するものとなった。Cook (2003) が提唱した多重言語能力の概念を取り入れると、韓国人日本語学習者は、韓国語の言語能力に日本語の言語能力が足され、韓国語母語話者や日本語母語話者とは異なる新たな言語体系を持っていると言える」(尹2016:52)と結論付けた。良い影響として捉えれば、Cook (2003) が支持され、悪い影響として捉えれば、Cook (2003) を却下するという結論もやはり肯定的か否定的かという二律背反にこだわりすぎた結果であると思われる。それに対し、本来考察すべき評価の背後にある要因や評価が物語る「逆向転移」のメカニズムなどは脱落している。

さらに、アンケート設問のデザインにも問題がある。例えば、

- ・日本語の学習により、日本語と韓国語を比較することが(ママ)できるようになった
- ・日本語を学習し、韓国語に存在する漢字語に対する理解度が高くなった
- ・日本語を学習し、韓国語に存在していない概念(日本語特有のニュアンス)も理解できるようになった

といった設問(尹2016:42-43より抜粋)があるが、実際の言語意識と異なり、外国語を学習しても、外国語と母語を比較することができない、外国語特有のニュアンスを理解できないという回答は、極初期の学習者以外からはおそらく得られないと推測できよう。つまりこういった設問は結果的に、調査結果を大きく「肯定的影響」のほうに誘導していると思われる。最終的にこの結果は、「全体的には肯定的な影響」という結論にも繋がったと思われる。

このような誘導尋問になる可能性をできるだけ回避するため、筆者は次章で紹介する調査を行う際、「設問」や「誘導」を最小限にし、被調査者自らの語りを中心に収集した。分析する際も肯定的か否定的かという評価の以外の面にも注目し考察を行った。

### 3. 調査Bからわかったこと

現時点で、「逆向転移」に関する本格的な意識調査がほぼ展開されていないため、本稿では、尹(2016)や羅(2016)の成果と問題点を踏まえ、筆者が2011年に行った調査(調査B)の結果と、書物に記された著名人の言語観らしきものとも突き合わせて、分析を行い、「逆向転移」の全体像の解明を試みる。

#### 3.1. 実施概要

実施期間：2011年9月～2013年3月、調査Aの実施期間中

実施地：上海、アモイ、大連

対象：羅(2016)で取り上げた[关于汉语使用情况的调查]

a、b(調査A)の被調査者の一部

人数：13人(うち女性8人、男性5人)

#### 3.2. 調査方法

調査Aの回答用紙を回収する際、ランダムに調査Aの被

調査者に声をかけ、調査Bに協力するよう求める。最終的に13人のインフォーマントを確保した。

協力を承諾してくれたインフォーマントに、

- 1、アンケート調査(調査A)の感想を聞く
- 2、中国語の「乱れ」や日本語の影響などに自ら気づいているかを見る「逆向転移」と関係のある発言があれば記録する
- 3、アンケートにある代表的な「逆向転移」例文を自然な中国語に訂正してもらい、(できなかった場合は、調査実施者が訂正し)さらに意見を求める
- 4、「逆向転移」と関連のある発言が一切ない場合のみ)日本語の影響の可能性を指摘し、意見を求めるという流れで自由に意見を述べてもらう。ただし、答えによって質問の順番が変わることもあった。

そして、日本語未習得者(初級以下)のインフォーマントに対して、

- 1、アンケート調査(調査A)の感想を聞く
- 2、アンケートにある代表的な「逆向転移」例文を自然な中国語に訂正してもらい、その後日本語の影響の可能性を指摘する
- 3、再度意見を求める

という流れで日本語知識の有無にも配慮して実施した。

また、日本語と接触のある被調査者は全員言語獲得の敏感期(sensitive period/critical period)以降日本語と接触をはじめたものに限定した。調査対象となる学習者全員はJFL(Japanese as a Foreign Language)環境で外国語を習得し、JSL(Japanese as a Second Language)環境の被調査者がいなかった。

実際の調査例は下記のようなものである。(調査は中国語で行われ、質問と回答の訳は筆者による。なお紙幅の関係で質問文の原文を省略する)

#### 回答例1

Q：アンケートに対してなにか感想はありますか。

A：这些应该都是学了日语的人说的吧。

(日本語を習った人たちの言っている文章でしょうね。)

Q：そうですね。可能性はありますね。どのような人だと思いますか。

A：我觉得理科生比较多。

(理系の学生に多いと思いますね。)

Q：なぜですか。

A：因为我觉得他们讲话不动脑子。学文的可能对语言比较敏感。

(彼らは喋るとき、全然頭を使おうとしないからだと思います。文系の学生でしたら、もっとことばに敏感なはずです。)

Q：なんでこの文(アンケートの例文)を自然と判断しましたか。

A：你要这么说这句话确实有点怪怪的。不过读的时候觉得没问题。

(そういえば確かにちょっと変ですね。でも読むときはまったく気づかなかったのです。)

属性：女性、26-30歳<sup>4</sup>、上級

#### 3.3. 調査結果

13人のインフォーマントのうち、それぞれ、(性別ご

と) 男性5人、女性8人、(レベルごと) 日本語未習得者が4人、初級～中級学習者が5人、上級4人を占める。詳しくは表1のとおりである。

表1 インフォーマント構成

性別	未習得	初級～中級	上級
男	2	2	1
女	2	3	3

なお、日本語レベルの分け方に関しては、「逆向転移」は初級～中級の学習者に最も顕著に出るという羅(2016)の結果を踏まえてのものである。

### 3.3.1. 言語意識

尹(2016)が関心を示した「逆向転移」に対する肯定的か否定的かの評価に関して、本稿において、全体的に2人が中立的な評価を下した以外、13人中11人が「全部怪しい」、「頭を使おうとしないからだ」、「上品な中国語を反映していない」といった何らかの否定的表現を用いた。

特に日本語未習得者と上級者の評価が厳しかった。上級者のコメントとして上記の回答例1、未習得者のコメントとして下記の回答例2が最も代表的である。(読みやすくするため、質問文の訳文を可能な限りを短くまとめ、キープフレーズに下線をつけた。)

#### 回答例2

(アンケート全体に関して) 样卷的设计不能体现汉语的典型特征, 设计者不仅是留日学者, 同时也应是中国语言文化的传播者, 作为学术论文, 所设计汉语应突出汉语特征, 雅俗共赏。

(このアンケートは中国語の典型的な特徴を反映していません。調査者は在日学者という立場だけでなく、中国の言語と文化を広めるものでもあるべきです。だから、学術論文として、その調査文の中国語は、通俗的でありながらも上品な中国語の典型的な特徴を反映しなければなりません。)

(なんでそう思いますか。) 我觉得现在的学生都去学外语, 不好好学自己的语言所以会说出这样的句子。

(最近の学生はみんな外国語ばかり勉強して、母語をまじめに勉強しようとしなからこのような文を使ってしまうのです。)

属性：女性、36-40歳、未習得

13人中11人が否定的表現を用いて評価するという結果は尹(2016:44)の調査結果「学習環境の違いに関わらず、半分以上が日本語学習は韓国語に良い影響を与えた」と大きな開きがあり、どちらかという尹(2016)の立てた仮説を支持することになった。

その理由について二点考えられる。

- 1、先行研究ですでに言及したように、尹(2016)の行った意識調査の調査文に「肯定的な影響」に誘導するような文言が散見される。それによって、調査結果は大きく「肯定的」のほうに傾いたのであろう。
- 2、本稿のように、全体的によい感情を抱くかどうかを調べる場合と尹(2016)のような小項目を分けて調査する場合、なんらかの差があっても不思議ではない。ただ、結論が相反するほどの影響があるかどうかは不明である。

明である。

ちなみに、中立的なコメントをした2人は、「初級～中級レベル」に属す。実際のやりとりは下記の通りである。(回答例3、回答例4)

#### 回答例3

(日本語の影響等に関する発言なし。例として「発表」の使い方を指摘すると) 这个时候不是说“发表”吗? 那应该说什么呢?

(この場合「発表」と言わないのですか。じゃ、なんと言うのですか。)

(添削例として“发言”と“做报告”などを示されると) 好像是这样说比较好。

(なるほど。確かにそのほうがいいかもしれませんね。)

属性：女性、21-25歳、初級～中級レベル

#### 回答例4

(アンケート全体に関して) 我觉得就像小学生的作文, 如果仔细改每一句都有问题, 但是那不叫真的话都能说得通。

(小学生の作文のように、真面目に直そうとしたら必ずどこか直すところがあるのですが、そこまでなくてもだいたい通じますよ。)

属性：男性、36-40歳、初級～中級レベル

### 3.3.2. 気づき

全体的に、最初の質問の段階で日本語による「逆向転移」らしきものを自ら言及した割合は9人(未習得者除き)中6人で、約67%を占める。

それから、添削例を示される前に、不自然なところを自ら見つけたり、あるいは適切な言葉で補ったりする確率は、9人中5人で、過半数を占める。

また、実際のやり取りの中、調査文を添削したうえで、さらに自分の実体験を交えて説明する被調査者も2人いた(2人とも上級)。例えば、下記のような回答例があった。

#### 回答例5

(文章の不自然なところを自ら指摘して) 最近中文的语法都说着说着说成日语语法了。动词放最后了。刚才还问别人：“你工作现在有没有？”

(僕も最近中国語を日本語の文法で文を立てているような気がします。動詞は最後に置いてしまうとか。さっきも人に「你工作现在有没有？」<sup>5</sup>と聞いてしまいました。)

属性：男性、21-25歳、上級

回答例5の場合、インフォーマントは、自分の母語の不自然さに気づいているだけでなく、それは日本語によるもので、語順に影響が出るなどをすべて把握しており、極めて高いメタ言語能力を示している。個体差、あるいは言語適性の差は排除できないものの、偶然にもこのメタ認知能力は上級レベルのインフォーマントに見られるのが興味深い点であろう。

一方、回答例3では、インフォーマントが文法性判断の能力を失い、もちろん添削もできないままになっている。この点において、上級レベルの学習者と決定的な違いがみられる。また、羅(2016)の調査結果「日本語レベルが初級～中級の学習者が最も『逆向転移』を受けやすい」とも一致している。

#### 回答例3(再掲)

(日本語の影響等に関する発言なし。例として「発表」

の使い方を指摘すると) 这个时候不是说“发表”吗? 那应该说什么呢?

(この場合「发表」と言わないのですか。じゃ、なんと言うのですか。)

(添削例として“发言”と“做报告”などを示されると) 好像是这样说比较好。

(なるほど。確かにそのほうがいいかもしれませんね。)

属性：女性，21-25歳，初級～中級レベル

ただし、その後のやりとりでもわかるように、その能力が永久的に失われたのではなく、調査者の指摘によって簡単に取り戻される。したがって、回答例3のインフォーマントは、母語の知識自体がなくなったのではなく、自然にアクセスすることに失敗したと考えられよう。

#### 4. 書物から読み取れる学習者の言語観

最後に、本章において、一外国語学習者でもある江崎玲於奈と魯迅の言語観を取り上げ、前出の上級レベルの学習者の語りと対照しつつ、分析を行う。

##### 4.1. 江崎氏の日本語に対する考え

江崎氏は『創造性への対話：江崎玲於奈対談集』（1974、東京：中央公論社：22-24）において、日本語に対して、西洋史家堀米庸三氏との対談から下記のような意見を述べている。(下線は筆者による。)

たとえば言葉にしても、わたくしがこのあいだ経験したことですが、ノーベル賞受賞記念講演のためわたくしが英文で書いた原稿を日本のある雑誌が載せたいというので、それを日本語に翻訳したのです。わたくしは日本人ですから日本語なら簡単だと思っていたのですが、とんでもないことでした。新しく作文するのなら簡単でしょうが、ノーベル賞委員会に著作権がある以上、いい加減な訳をするわけにはいかない。忠実に、しかもわたくしのもっている英語のニュアンスも入れようと思うと、科学的な論文なものですから正確に日本語で叙述することはたいへんむずかしい。日本語には関係代名詞がないでしょう。つまり日本にはいままでそういう科学的なものを表現する必要がなかったのだと思います。(中略)それから複数や単数の区別がぜんぜんないですね。また性別もあいまいだ。「あなた」といったら彼でも彼女でもあまり大きな違いはない。(中略)こうした島国に住む同一民族だから、あまり複雑なことを考える必要がなかったんじゃないですか。

母語である日本語に対して、「科学的なものを表現する必要がなかった」と指摘したうえ、性や数の問題なども取り上げての、批判的な意見である。もちろんノーベル賞受賞記念講演や科学的論文は、日常会話と違って、緻密性を求め、日本語に定着していない英語由来の専門用語などを使用する確率が必然的に上がる。ただし、面白いことに、最後の一言から見れば、江崎氏はこの体験を科学分野特有の問題に限定せず、日常生活、ないし文化（「島国」や「同一民族」）の問題にまで拡大して解釈している。つまり、それこそが江崎氏の日本語に対する言語観と言えよう。

##### 4.2. 魯迅の中国語に対する考え

一方、魯迅は『二心集：“硬译”与“文学的阶级性”』（1930

年3月／『魯迅全集（第四卷）』2005、北京：人民文学出版社：379-398）において、下記のように述べた。(訳と下線は筆者による。)

中国的文或话，法子实在太不精密了。(中略) 讲话的时候，也时时要辞不达意。这就是话不够用。

(中略) 这语法的不精密，就在证明思路的不精密，换一句话说，就是脑筋有些糊涂。(中略) 要医这病，最好陆续吃一些苦，装进异样的句法去，古的，外省外国的、外国的，后来便可以据为己有。这并不是空想的事情。(魯迅2005：391-392)

(中国の文章あるいは言葉は、その法則があまりにも不精密です。(中略) 話すとき、しばしば伝わらないことがあります。(中略) この文法の不精密ということは、思考方法の不精密ということを証明しています。言葉を変えて言えば、頭がボヤけているということです。(中略) この病気を治すためには、私は次々と苦いものを食べ、異様な句法を詰め込んでいくしかない、古いものでも、方言でも、外国のものでも仕方がないと思います。いつかそれが自分自身のものになるのです。遠い例としては、たとえば日本ですが、彼らの文章には欧化した文法が極めてあたりまえのものになっています。これは決して空想ではありません。)

その他、「日本語の欧化現象」に対して、同書において、下記のように述べた。(1930年3月／『魯迅全集（第四卷）』2005、北京：人民文学出版社：203-204)

如日本，他们的文章里，欧化的语法是极平常的了，和梁后超做《和文汉读法》时代，大不相同。

(例えば日本では、すでに欧米化した文法がきわめて普通になりました。(今の日本語は) 梁啓超が『和文漢読法』を書いた時代の文章とまったく違います。)

さらに遡れば、実は下記のようなことも述べたことがある。(1922年5月／『魯迅全集（第十卷）』2005、北京：人民文学出版社：232)

日本語实在比中国語更优婉。

(日本語は実に中国語より優婉です。)

日本語と比較しつつ、中国語の文法と語彙は不精密であると指摘した上、日本語に倣って外来のものを取り入れる必要性を指摘している。

#### 4.3. 考察

##### 4.3.1. 母語批判 v s 外国語批判

両氏が言っている具体的な内容こそ異なっているが、共通しているのは、母語への批判、特に（習得したもうひとつの言語と比べた上での）母語の弱点や非合理的なところへの批判である。この批判は外国語の習得によって形成されているという点を考えると、「逆向転移」による言語意識の変化と捉えてもよからう。

また、この種の批判に関しては、回答例5を分析する際でも考察したように、かなり高度なメタ言語能力を要すると思われる。両氏の実際の言語レベルを考えると、やはり回答例5と類似しているところが多いと思われる。

ただし、上級学習者の態度は、母語への批判のみならず、ときには学習する外国語への批判にもつながる。去年世間を騒がせた施光恒著『英語化は愚民化 日本の国力が地に

落ちる』(2015、集英社)はまさにその好例である。著者の施氏は英国シェフィールド大学大学院政治学研究所の出身であり、間違いなく英語の上級者であると思われる。しかし、著書のタイトルからでもわかるように、同じ英語上級者の江崎氏とは意見が真逆である。施(2015:6)は冒頭から「英語化は日本を壊すのである」と述べ、専門の政治学の視点から日本における英語教育の現状を批判している。

施(2015)の論点は言語政策の面に集中しているが、英語を学習することによって、日本語がだめになってしまうのではないかという憂慮も至るところで読み取れる。この意見に近いものは、上記で紹介した回答例2であろう。つまり、外国語の上級者と未習得者は外国語の学習に対する認識に共通しているところがあると言えよう。

尹(2016)が収集したデータにおいても上記に似たような語りが多くあり、「比較的日本語への接触頻度が高いと思われるJSL環境の韓国人日本語学習者は、逆転移に対しより敏感である」(尹2016:53)という事実も指摘されたが、評価が肯定的か否定的かにこだわったあまり、もっと重要な事実を見落としている。本稿では、母語批判にせよ、外国語批判にせよ、この2つの批判は外国語の上達によるメタ言語能力の発達によってもたらされたものの、つまり背後に同じメカニズムが働いていると考えている。

そして、回答例1で見られた理系か文系かによって「逆転移」の使用状況が異なるといった指摘も、ただの偶然かもしれないが、江崎氏と施氏の学術背景を考えると合致する面がある。

#### 4.3.2. 意識的 v s 無意識的

本稿は、インタビューで収集した外国語学習者の語りを中心に展開してきたが、学習者が持っている明示的知識と暗黙的知識は時々矛盾しており、よって、その語りは真実のすべてを物語っているとは限らないという事実は、先行研究のJarvis(2003)が指摘している。

例えば、魯迅の文章に見られる翻訳調的な表現に関する研究の多くは、本稿4.2節で取り上げた魯迅の発言のみを頼りに、すべて魯迅が意識的に使用していると判断している(例えば、徐2012、張2006、朱2006など)が、羅(2015)では、魯迅作品に登場する「匹」という助数詞を例に、魯迅が意識的に運用している面と無意識的に使用してしまった面が両方あると指摘し、魯迅研究にも「逆転移」の視点を取り入れるべきだと主張する。

胡(2005)では、魯迅の作品に見られる「的」と「地」の使い分けについて、作品の刊行順を追って調査しているが、終章において興味深い指摘をしている。(胡2005:97)

魯迅において、“的”“地”の使い分けについて、その最初の作品では混在していたのに対して、1924年以後、魯迅は区別して使用している。1925年から1930年までその使い分けがほぼ定着しているように見えたが、しかし、1931年10月以後また最初の未分化の状態に戻っている。1924年までの混在、1925年から1930年におけるの使い分け、1931年以後の逆戻りがある。このどちらも意図的と見ることができるかど

うか、これが第一の問題である。このような経過について、第二に、なぜ魯迅はいったん“的”の使い方を1925年から1929年にわたって綺麗に分けたのか、そうしたのにもかわらず、1931年からなぜ再び元に戻っていたのだろうかという問題が生じる。更に広汎に見ると、彼と同時代の現代文学先駆者たちもみな同じくこのような経過をたどっていたのだろうか。もし異なるのであれば、それは何故だろうか。また、1930年の魯迅作品に目立つ“底”の用法をどう理解したらいいか。それと“的”の用法とに関連性があるのだろうか。これらの問題について、これから追求していきたい。

胡(2005)が課題にしている逆戻りの問題に関しては、もしかしたら、羅(2016)で明らかになった「逆転移」の度合いと外国語習得レベルの波状上昇や金沢(2002:47)が論じた異文化接触の時間的变化(同じく一直線ではなく波状変化)がヒントになるかもしれない。

## 5. おわりに

本稿では、調査Bの結果と魯迅や江崎玲於奈の言語観を突き合わせて、言語意識の面で「逆転移」現象を考察した。

第3章において、ほとんどの被調査者は「逆転移」に対して否定的な感情を抱いており、特に日本語未習得者と上級者の評価が厳しかったという事実が判明され、尹(2016)の結論が覆されたと言った。

また、上級者の回答例からは高いメタ言語能力が見いだされ、初級～中級の学習者の例からは母語知識がなくなったのではなく、自然にアクセスできなくなっているという事実を発見した。

第4章では、江崎玲於奈と魯迅の言語観を取り上げ、母語に批判的であるという事実を確認し、同時に上級外国語学習者からは外国語に批判的な言論もよく見受けられるなどの事実から、互いに矛盾しているのではなく、ともに高いメタ言語能力によってもたらされたものであるという同じメカニズムの存在を指摘した。最後に、Jarvis(2003)の指摘を援用し、意識調査の結果は事実をすべて物語っているわけではなく、意識にのぼらない部分もあり、それに関しては、羅(2016)や金沢(2002)などによる解釈の可能性を指摘した。

ただし、「逆転移」に関する意識調査は、まだ十分展開されていないこともあり、本稿にも議論しきれっていない部分と課題が多々あると思う。この分野における今後の研究に期待しつつ、筆者も引き続き「逆転移」の解明に努めていきたいと考えている。

## 参考文献

- (日本語)  
Bialystok, E., Hakuta, K. (2000). 外国語はなぜなかなか身につかないか：第二言語学習の謎を解く。(重野純, 訳). 東京：新曜社。  
Lightbown, P. M., Spada, N. (2014). 言語はどのように学ばれるか：外国語学習・教育に生かす第二言語習得論。(白井恭弘 & 岡田雅子, 訳). 東京：岩波書店。  
東照二. (2000). バイリンガリズム：二言語併用はいかに可能か. 東京：講談社。  
東照二. (2009). 社会言語学入門<改訂版> 生きた言葉のおもしろさに迫

- る(改訂版). 東京: 研究社.
- 池田佳子. (2010). 言語接触とアイデンティティ(特集 言語接触の世界) - (言語接触のなかに生きる人々). 日本語学, 29 (14), 196-206.
- 江崎玲於奈. (1974). 創造性への対話: 江崎玲於奈対談集. 東京: 中央公論社.
- 金沢吉展. (2002). 日本文化への適応と援助: 異文化接触の心理学. In 海保博之, 柏崎秀子(編.), 日本語教育のための心理学 (pp. 43-57). 東京: 新曜社.
- 近藤安月子, 小森和子(編.). (2012). 研究社日本語教育事典. 東京: 研究社.
- 胡蓉. (2005). 鲁迅における欧化の文法:"的""地"の使い分けを手がかりに. 多元文化, 5, 85-100.
- 真田信治(編.). (2006). 社会言語学の展望. 東京: くろしお出版.
- 真田信治, 渋谷勝己, 陣内正敏, 杉戸清樹. (1992). 社会言語学. 東京: おうふう.
- 真田信治, 庄司博史(編.). (2005). 事典日本の多言語社会. 東京: 岩波書店.
- 芝田稔. (1987). 日本中国ことばの往来. 東京: 白帝社.
- 渋谷勝己. (2013). 多言語・多変種能力のモデル化試論. In 片岡邦好, 池田佳子(編.), コミュニケーション能力の諸相: 変移・共創・身体化 (pp. 29-51). 東京: ひつじ書房.
- 沈国威. (2008). 近代日中語彙交流史: 新漢語の生成と受容(改訂新版). 東京: 笠間書院.
- 鈴木孝明, 白畑知彦. (2012). ことばの習得: 母語獲得と第二言語習得. 東京: くろしお出版.
- 施光恒. (2015). 英語化は愚民化 日本の国力が地に落ちる. 東京: 集英社
- 高木千恵. (2006). 関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相. 阪大日本語研究.
- 日本語教育学会. (2005). 日本語教育事典(新版). 東京: 大修館書店.
- 野田尚史, 迫田久美子, 渋谷勝己, 小林典子. (2001). 日本語学習者の文法習得. 東京: 大修館書店.
- 宮島達夫, 江川清, 真田信治, 野村雅昭, 中野洋, 佐竹秀雄. (1982). 図説日本語. 東京: 角川書店.
- 村端五郎, 村端佳子. (2016). 第2言語ユーザーのことばと心: マルチコンピテンスからの提言. 東京: 開拓社.
- 尹テレサ. (2014). 韓国人日本語学習者における第二言語から第一言語への転移現象: 授受表現「てもらう [a/eo batda]」形に焦点を当てて (<特集>多言語社会日本の言語接触に関する実証研究). 社会言語科学, 17 (1), 49-60.
- 尹テレサ. (2016). 第二言語から第一言語への言語転移現象に関する実証的研究: 韓国人日本語学習者の「てもらう [a/eo batda]」表現に注目して(博士論文). 東京学芸大学.
- 羅沢宇. (2015). 目標言語から母語への逆向転移の実例: 日本語から中国語へ. 静岡文化芸術大学研究紀要, 15, 89-96.
- 羅沢宇. (2016). 逆向干渉の度合いと被調査者の社会的属性について: 調査の結果から. 静岡文化芸術大学研究紀要, 16, 55-62. (英語)
- Cook, V. (1991). The poverty-of-the-stimulus argument and multicompetence. *Second Language Research*, 7 (2), 103-117.
- Cook, V. (Ed.). (2003). *Effects of the Second Language on the First*. Clevedon ; Buffalo : Multilingual Matters.
- Cook, V., & Singleton, D. (2014). *Key Topics in Second Language Acquisition*. Bristol : Multilingual Matters.
- Jarvis, S. (2003). Probing the Effects of the L2 on the L1 : A Case Study. *Effects of the Second Language on the First*, 81-102.
- Trudgill, P. (2001). *Sociolinguistics : An Introduction to Language and Society* (Fourth Edition). London ; New York : Penguin Books. (中国語)
- 陳力衛. (2011). 試論近代汉语文体中の日語影響. 東アジア文化交渉研究別冊, 7, 43-53.
- 达维. (1995). 鲁迅作品中的“匹”. 咬文嚼字, (4), 30-31.
- 黄琼英. (2007). 鲁迅作品语言历时研究(博士論文). 华东师范大学.
- 鲁迅. (2005). 鲁迅全集(第四卷). 北京: 人民文学出版社.
- 鲁迅. (2005). 鲁迅全集(第十卷). 北京: 人民文学出版社.
- 罗泽宇. (2015). 量词“匹”特殊义项的生成与消亡: 从日语对汉语影响的角度. 日本学研究, 24, 1-9
- 沈国威. (2010). 近代中日词汇交流研究: 汉字新词的创制、容受与共享. 北京: 中华书局.
- 沈国威. (2011). 现代汉语“欧化语法现象”中的日语因素问题. 東アジア文化交渉研究別冊, 7, 141-150.
- 徐桂梅. (2012). 鲁迅小说语言中的“日语文素”解析. 鲁迅研究月刊, (2), 45-51.
- 曾元沅. (2006). 手上阡陌. 上海: 学林出版社.
- 张景华. (2006). 从“硬译”透视鲁迅对中国文化转型的探索. 四川外语学院学报, 22 (2), 66-71.
- 朱凌燕. (2006). 论鲁迅翻译中的“信而不顺”. 绍兴文理学院学报: 哲学社会科学版, 26 (1), 26-30.
- 朱一凡. (2011). 翻译与现代汉语的变迁(1905-1936). 北京: 外语教学与研究出版社.

<sup>1</sup> 初出はCook (1999) より。村端・村端 (2016: 2) では「複合的言語能力」と訳す。本来L1とL2を一つの体系にまとめる包括的な考え方であるが、母語から目標言語への影響に関しては、すでに「母語干渉」という第二言語習得 (SLA) の研究分野が確立されているため、結果として「マルチコンピテンス/複合的言語能力」の研究領域は本稿の扱う「逆向転移」のテーマに近いものになっている。

<sup>2</sup> 訳は筆者による。以下同様。

<sup>3</sup> 尹 (2016) は「逆転移」と呼んでいる。

<sup>4</sup> 年齢は調査当時のものである。

<sup>5</sup> 語順は「あなたS 仕事O あるかV」になっており、中国語のSVO構造から逸脱している。

